

若返り時代のアメリカ小説

橘 幸子

1. 若返りブームの到来

1920年代のアメリカ社会は、アメリカの歴史の中でも極めて特異な時代である。第一次世界大戦後、未曾有の好景気のおかげで大量生産・大量消費のスタイルが確立し、自家用車や家電が普及して、生活スタイルが一変した1920年代、別名「狂騒の20年代」、もしくは当時の人気作家F.スコット・フィッツジェラルドが命名した「ジャズ・エイジ」には、映画やジャズが隆盛を極め、スポーツ界ではベーブ・ルースやジャック・テンブシーが活躍し、暗黒街ではアル・カポネが暗躍した。

この時代の、他とは異なる最たる特徴と言えるのが、“Younger Generation”と呼ばれる若者たちが社会を牽引していったことであろう。フラッパーという呼び名が与えられた若い女性たちは、それまでの伝統に反発する形で髪もスカート丈も短くして濃い化粧をし、公然と喫煙や飲酒をしながら、彼女たちの男性版であるシークたちと車で遊びまわり、ジャズに合わせて激しいダンスを踊り、不純な異性交遊に明け暮れる。こうした若い世代が社会の前面に現れ、支配的な“Youth Culture”を形成していったのである。

ここで、アメリカにおける年齢意識がこの時代までにどのように変化してきたのかについて、軽く触れておこう。元々は、人間の老化の仕組みは神のみが関知する領域だと考えられており、良い精神や道徳を維持していれば、「美德、健康、自立、自然死、そして魂の救済」という、良い老年が迎えられると信じられていた。しかし、19世紀後半から、チャールズ・ダーウィンによる『種の起源』(1859)をはじめとした進化論や、科学の進歩、医学の発展によって、経年変化は人間の未知なる領域ではなくなっていく。それに伴い、年を取ることは人間としての成熟を表すというよりも、不安や憂いの対象へと変化していった。

このような年齢意識の変化と、若者文化の台頭が相まって、1920年代には「若さこそが美德」という風潮が生まれることになる。この時代に、『サタデー・イブニング・ポスト』など、流行を映し出す大衆紙に主な作品を発表した作家リング・ラードナーの短編「息がつまりそう」(1926)では、14歳のころから年間最低でも5回は婚約をしてきたという、性的に奔放な、いかにも1920年代的な18歳の女の子が、自分の叔父と叔母についてこのように語っている。

叔父さんと叔母さんは、自分たちのダンスなんて楽しめなかったにちがいないわ。年寄りにはダンスなんて楽しめないもの。だって、年寄りって何にも出来ないんだから。

彼女が「年寄り」だと言う叔父と叔母の年齢は、35歳である。フィッツジェラルドの代表作『グレート・ギャツビー』(1925)においても、語り手のニック・キャラウェイは32歳のギャツビーがジャズに合わせて当時流行していたフォックス・トロットという激しいステップを優雅に踊るのを見て驚いている。また、当のニック自身が物語の終盤で30歳の誕生日を迎えた際には、その衝撃を以下のように表現する。

僕は30だった。前途には、新しい10年の不気味な歳月がおびやかすようにのびていた。……30歳—今後に予想される孤独の10年間、独身の友の数はほそり、情熱を詰めた鞆も細くなり、髪の毛もまたほそってゆくことだろう。

若者が社会を席卷し、若い年齢でなくなった後はもう人生の終盤だ、という思潮は、しかし、1920年代が進むにつれて変化していく。年配の男性が若

者のダンス・ステップをまねしだし、年配の女性は若い娘のものと同じ丈になるようにスカートをカットし始める。『フォーラム・マガジン』が読者に、「いつも忘れないでいましょう、年齢通りにふるまわない、ということ」と提唱したように、1920年代半ばから、“Younger Generation”よりも年長の人々が、精神的な若さを保つというだけではなく、若者文化を積極的に取り入れて模倣し、そうすることによって自分も若々しくあり続けようという若返りの動き、アンチ・エイジング・ムーブメントとも言うべきものが巻き起こるのである。

時代を反映した作品を発表するだけでなく、流行を先取りして自ら新たな流行を作り出すような作品を書き、1920年代のスポークスマンと言われたフィッツジェラルドは、他の人々よりも若干早い時期に、この“*Youth Culture*”〔若者文化〕から“*Youth Cult*”〔若さ崇拜〕への移行を敏感に感じ取っていた。

1922年という年が証拠として提出されてほしい！この年は若い世代の絶頂期だった、というのは、その後もジャズ・エイジは続いたが、しだいに若者のものではなくなっていったからだ。

それ以後は、子供のパーティーを大人が引き継いだようなもので、子供たちは当惑し、なんとなく無視され、かなり驚いていたという次第だ。1923年までに、大人たちは心ならずも羨ましさを隠しきれずにカーニバルを眺めることに飽きて、若い酒が若い血に取って代わるものだという事に気づいていた。そして歓声とともに馬鹿騒ぎが始まった。若い世代はもはや主役ではなかった。

この「ジャズ・エイジのこだま」(1931)というエッセイは1930年代になってから当時を振り返ったものだが、実際にフィッツジェラルドが1922年に発表した「ベンジャミン・バトンの奇妙な症例」という短編では、70歳の容姿で生まれてきた主人公が身体的・精神的にどんどん若返っていくという、若返りブームの到来を意識したかのような設定が用いられている。

2. 人間の一生に関する2つのイメージ

ここからは、フィッツジェラルドの友人であり、彼同様に時代の流行に敏感であったリング・ラード

ナーが、フィッツジェラルドの「ベンジャミン・バトンの奇妙な症例」と同じ1922年に発表した短編小説「金婚旅行」の中で、この時代の若返りムーブメントをどのように表しているのかについて、まずは当時定着していた人間の生涯に関する2つのイメージをもとにして考えていきたい。

この物語では、70歳代半ばの主人公チャーリーが1人称の語り手であり、彼が70過ぎの妻とともにフロリダに出かけて行ったとき、その1か月と1日の旅行中にどんな出来事が起こったのかを、おそらくは初対面であろう聞き手に対して事細かに語っていくという形をとっている。

主人公の老人夫妻が結婚したのは50年前の12月17日、したがってこの年は金婚式の年であり、フロリダ行きはそのお祝いの旅行である。原題の“*Golden Honeymoon* (新婚旅行)”が象徴しているように、主人公の老人夫婦の金婚旅行は疑似新婚旅行、若返りの旅という様相を呈していく。だが、ここでまず注目したいのは、そもそもフロリダに行く案が出たのは、自宅で寒い冬を過ごすのを避けるためだということである。

人間の年齢と季節との関係について、この作品が執筆されるまでに定着していたイメージを作り出したのは、画家のトーマス・コールによる『人生行路』と題された4枚の連作絵画である。19世紀に発表されるとアメリカで大変な人気を博して広く普及したこの作品では、人間の一生が4つの区分に分けられ、それぞれが四季になぞらえられており、「*Childhood* (幼年期) = 春」, 「*Youth* (青年期) = 夏」, 「*Manhood* (壮年期) = 秋」, 「*Old Age* (老年期) = 冬」として表現されている。

「金婚旅行」に話を戻すと、老夫婦はとりわけ寒い冬の自宅を離れてフロリダ州セント・ピーターズバーグに出向くのだが、その地が冬らしさを全く感じさせない場所であるということが作中では強調されている。

セント・ピートのことを地元の間人はタウンと呼んでいるが、サンシャイン・シティともいう。というのも、アメリカの国内で、ここほどお天道様が母なる大地に微笑みかける日が多いところは、他にはないからだって言うんだ。新聞社のなかには、太陽の照らない日は新聞を無料にする、とい

うところまであった。この11年間のうち、ただで配ったのはたった60何回だけだったという話だよ。

年齢と四季のイメージを踏まえて考えると、「老齢」を表す冬から逃れて、できるだけ「若さ」を表す夏に近づけるような暖かい場所に向かうという、作品の設定自体が、老夫妻の旅行が若返りムーブメントを反映するようなものであることを最初から暗示していると言える。

人間の年齢に関して、作品出版までに社会に定着していたもう1つのイメージは、人の一生を10年ごとの段階で区切って考えるという「ライフ・ステージ」である。絵画では、10年を1段として、上り下りする半円形の階段で表されることが多いのだが、ここではその格言版を引用してみよう。

10歳は子ども
20歳は若者
30歳は一人前の男
40歳は裕福
50歳は静止状態
60歳で老年が始まる
70歳は老人
80歳で知恵が失われる
90歳は子どもたちの笑いもの
100歳で神に召される

「金婚旅行」においてもっとも印象的なのは、主人公のチャーリーが、作品の冒頭ではフロリダ行きの、終盤では帰りの、列車が通る駅の出発・到着時刻や待ち時間を分刻みで正確に、不必要なほど細かく暗唱してみせることだ。

汽車はノース・フィラデルフィアに午後4時3分に到着したあと、ウェスト・フィラデルフィアには4時14分着、だがブロード・ストリート駅へは入らなかった。ボルティモア着は6時30分、ワシントンD.C.着は7時25分。

こうして彼が執拗に時刻に関する細かな情報を語っているのは、「ライフ・ステージ」のイメージで言えば70歳代半ばであるチャーリーは「老人」と

なった後で「知恵が失われる」状態に進みつつあるはずなのだが、むしろそれに逆行するように、自分の知恵が全く失われておらず、実年齢よりも若いのだとアピールしているとも考えられる。

3. 若返りの旅

主人公夫婦の金婚旅行が若返りの旅へと変身する直接的な契機は、夫妻がフロリダに来て2、3日後に、妻ルーシーの元婚約者であったフランクに出会ったことである。チャーリーによれば、52年前に彼がフランクからルーシーを奪って以来、初めての再会となる。フランクに再会した時の最初の印象として、チャーリーがまず聞き手に語るのは、同年同月生まれのフランクの容姿よりも、自分のほうがずっと若々しいということだ。

あいつとわしは生まれた年も同じ、月まで同じなんだが、あいつのほうがどう考えても老けていたんだよ。ひとつには、やつのほうがわしより断然髪が薄かったんだ。ひげだって、あいつのは真っ白、それにくらべてわしのは、まだ茶色い筋が残っているだろ？

再会してから、チャーリーとルーシー夫妻、フランクと彼の妻の4人は行動を共にするようになり、その過程でチャーリーとフランクは、数十年もやっていなかったチェッカーや蹄鉄投げなどのゲームで勝負し、互いに挑発し合う。

恋のライバルであったフランクとの接触は、チャーリーの記憶力にも影響を与える。旅に出てからフランクと会う前まで、チャーリーの心に残った人物の中でその名前が告げられるのは、80歳代であるにもかかわらず、テキサス州ブレイスからはるばる2,640キロ933メートルの道のりを1人で車を運転してきたという、実年齢から言えば驚くほどに元気で若いペンス氏ただ1人だけだ。それ以外の人たちは、「ニューハンプシャー州レバノンから来た80歳くらいの男」、「ニューヨーク州オグデンズバーグから来た男」、「オハイオ州アクロンから来た男」などと表現される。列車の時刻と同じように、出身地に関しては細かく覚えているチャーリーだが、個人名については「名前は忘れてしまった」と繰り返す。しかし、フランクと再会し、50年前のライバル意

識が再燃することによって、チャーリーの記憶力までもが若返っていったかのように、フランクと会って以降にチャーリーの印象に残った人々は、「ミシガン州デトロイトから来たビディング」、「ニューヨークおよびニュージャージー州人会」に出席していた「パターソンから来たレーン判事」と「ウェストフィールドのニューウェル夫人」、「ネブラスカ州イェグルから来たライアン夫人とヴァーモント州ルトランドから来た若いモース夫人」、「ロードアイランド州キングストンから来たケンドール夫人」というように、出身地だけではなく個人名も各々記憶されて語られていくようになり、刺激を受けた彼の知恵はますます歳よりも若く、冴えわたることになる。

フランクに挑まれたチェッカーの勝負で大勝を取めた後、チャーリーは妻ルーシーの前でフランク夫妻を悪く言う。しかしルーシーが奥さんではなくフランクだけの肩をもつような発言をするのを聞いて、チャーリーは気を悪くする。

「そんなにいっしょにいて楽しいのなら、きっと、あいつと結婚すれば良かったと思っているんだろう」

かあさんは笑って、わしが嫉妬してるみたいに聞こえるわ、って言うんだ。いったい誰が牛医者なんかに嫉妬するもんかね！

ここまでの作品内において、フランクの職業に関する言及といえば、再会した初日に彼が「獣医」だと紹介され、その直後に彼をからかいたいチャーリーによって「馬医者」だと呼ばれて馬の病気に関するジョークでフランクはしつこく絡まれる。だが、物語の中盤であるこの場面で突然チャーリーのフランクに対する呼び名が「馬」から「牛医者」へと変化する。

19世紀の性の抑圧に反旗を翻した1920年代には、フロイトの思想—彼の著作そのものというよりは、新聞や雑誌などのメディアを通して、「性の解放」ばかりが重点的に強調された、大衆化されたフロイトの思想—が大流行した。そのフロイトの分析の中でも特に有名なのが、馬を男性の性的エネルギーの象徴だとする解釈である。上記の場面で、妻ルーシーが元婚約者のフランクに対して好意をもっていることを知りショックを受けたチャーリーは、フ

ランクの職業から、枯渇していない男性的な力を表す馬を剥奪することにより、相手の男性性を貶めようとしていると考えることができる。

馬自体が男性性を表すものであるのに対して、馬の脚に着ける蹄鉄は、西洋においては長らく女性器の象徴だとされている。チェッカー勝負の後日にチャーリーとフランクが行った蹄鉄投げ勝負では、チャーリーは始まるとすぐに親指の皮がむけて怪我をし、途中で競技を止めてしまい、スコアでも大差をつけられて負けてしまう。女性性を表す蹄鉄をうまく扱えなかったことで酷く自尊心を傷つけられたチャーリーは、その日の夜に夫婦をシャッフルして、チャーリーとフランクの妻のペア対フランクとルーシーのペアで行われたトランプ勝負でも負けてしまう。嫉妬心が頂点に達したチャーリーは、ゲームに負けても、結局は52年前にルーシーはフランクではなく自分を選んだということを今さら当てこすり、その不躰な発言が原因でチャーリーとルーシーの間に喧嘩が起こって、2人はまる2日間口を利かずに過ごすことになる。その後の展開は、自分たちの金婚旅行を馬鹿馬鹿しい喧嘩で台無しにしたいというルーシーの発言をきっかけとして、フランク夫妻に比べてお互いがいかに良いパートナーであるかを確認しあいながら、チャーリーがルーシーの肩に手をまわして、その手を彼女が撫でまわし、若いカップルのように2人が「ひどくでれでれした」気分になったところで彼らは帰途につくことになる。

4. 若返りブームの終焉

1929年に世界大恐慌が起り、続く不況の30年代には、浮かれ騒いでいた20年代の「若さこそが美德」という風潮は廃れていく。若返りブームが終息した30年代に、フィッツジェラルドは最後の長編『夜はやさし』（1934）の中で、年相応であることを受け入れるヒロインを描いている。しかし、「金婚旅行」で高齢者の若返りを描いたリング・ラードナーのほうは、皮肉なことに、1933年で48年の生涯を終えることになってしまうのである。

(群馬県立女子大学専任講師)